

“I Prefer Dr. Johnson to Mr. Boz.”——
*Cranford*における文学論争をめぐる一考察

“I Prefer Dr. Johnson to Mr. Boz.”:
A Study of an Argument on Literature in *Cranford*

村上 幸大郎

Elizabeth Gaskell の *Cranford* の冒頭の、Dickens を好むブラウン大尉と Johnson 博士を好むデボラ・ジェンキンズ間の文学論争は、二人の文学の好みだけではなく、新旧の価値観の対立という、作品の主題をも表すものと見なされてきた。しかし、引き合いに出される作品のどの場面が朗読されたのか示唆されているにもかかわらず、なぜその箇所であればならないのかということについては、今までほとんど論じられていない。本論では、*Cranford* の中でブラウン大尉とデボラが朗読する *The Pickwick Papers* と *Rasselas* の具体的な場面をそれぞれ考察する。デボラはブラウン大尉が *The Pickwick Papers* の朗読を通じて自分たちの価値観を侮辱していると誤解し、*Rasselas* の朗読を通じて反駁しているということ指摘し、冒頭の文学論争は時代の変化を見て見ぬふりをしながら過去の生活慣習に固執するデボラ・ジェンキンズの複雑な心情を示唆しているということを明らかにする。

キーワード : イギリス文学、ヴィクトリア朝、Elizabeth Gaskell、Charles Dickens、Samuel Johnson

目次

- I 序
- II *The Pickwick Papers* の“a friendly swarry”
- III *Rasselas* の“the conversations between Rasselas and Imlac”
- IV 結

I 序

Elizabeth Gaskell の *Cranford* は 1851 年から 53 年にかけて、Charles Dickens が編集長を務める雑誌 *Household Words* で連載された。連載終了後に一冊の本として刊行される際に Gaskell は細かな

修正を加えているが、最も大きな変更は Dickens と *The Pickwick Papers* (1836-37) に関して言及されている場面であろう。物語の冒頭、克蘭フォードに越してきた退役軍人のブラウン大尉を歓迎する夕食の席で、文学好きの大尉は Dickens の *The Pickwick Papers* を読んだかと一同に尋ね、場を盛り上げるために当時連載中のこの作品の最新号から一部を朗読する。現在刊行されている版ではこうなっているが、*Household Words* に掲載された際には、Dickens の名は当時の人気作家 Thomas Hood に、朗読されるのは *Hood's Own* からの一節になっていた。この二つのバージョンの違いには、もともとの原稿ではブラウン大尉が話題に持ち出すのは Dickens であったが、自身が編集長を務める雑誌で自分の名前が何度も言及されることに気まずさを感じた Dickens が、無断で作品中の自身への言及を Hood に書き換えたといういきさつがある。

Dickens はこの勝手な変更を弁明する Gaskell への手紙の中で、“I hope and trust that the substitution will not be any serious drawback to the paper” (*Letters* 6: 549) と述べ、書き換えの影響は些末だと納得させようとしている。しかし、すでに多くの批評家が指摘しているように、ブラウン大尉の好きな作家が Dickens であることは、作品全体において大きな意味を持つ。¹先述の場面で Dickens の作品が話題に上ったことにより、ブラウン大尉と、Samuel Johnson 博士を敬愛するデボラ・ジェンキンズとの間で文学をめぐる論争が始まり、その後デボラは一方的に大尉に嫌悪感を抱く。この二人が異なるのは文学の趣味だけではない。克蘭フォードはなぜか男性が居つかない町で、年老いた女性たちは頑なに親世代の頃の価値観のもとで生活している。特に気位が高いデボラは、中流階級の住民の中心的存在として、旧態依然とした慣習に固執している。一方で、ブラウン大尉は退役後に鉄道会社に職を得て克蘭フォードに越してきた人物である。つまり、男性であること、そして近代化の象徴である鉄道関係の人間であるという点において、彼は克蘭フォードの秩序を脅かす闖入者である。ここでの文学論争は、新旧の価値観のみならず、克蘭フォードに迫りつつある近代化の影をも象徴的に示しているのである。Johnson 博士に比肩しうる英文学史上の巨人であり、かつ新しい時代の文学作品を生み出した作家となると、Dickens 以外にはありえない。連載が終了して作品が Dickens の手から離れ、本として出版される際に Gaskell が Hood に関する記述を Dickens に戻したことを考えても、彼女がこの Johnson 博士と相対する作家として Dickens の名を用いることに重要な意義を込めていたことは明らかであろう。

このブラウン大尉とデボラの文学論争については頻繁に論じられているが、*The Pickwick Papers* と Johnson 博士の *Rasselas* (1759) の中の、彼らが朗読した箇所が *Cranford* の主題とどう関わって

¹ 古くは夏目漱石が『文学論』の中で、「趣味の古きを繰り返して満足せるもの、或は推移して全く古きを離るる能はざるものと、古きに厭いて出来得る限り新に就かんとするもの間には激甚なる戦なかるべからず」(319) と述べ、この文学論争が新旧の時代を代表する二人の作家をめぐる論争である必要性を指摘している。また、Margaret Gantz や Felicia Bonaparte は、“order” や “reason” を重視する ジョンソン博士と、“imagination” や “spontaneity”、“feeling”などを特徴とする Dickens をめぐる対立は、後に克蘭フォードが直面する問題をコミカルに示唆していると指摘している (Gantz 143-4; Bonaparte 154)。

いるのかということについては、ほとんど論じられていない。後述するように、ブラウン大尉とデボラがそれぞれ作品のどの部分を読んだのかについては、ある程度特定できるような記述がなされている。もし Gaskell がここでの文学論争に重要な意味を持たせているのであれば、各々が朗読するのがなぜその箇所であればならないのかという問題は、より深く考える必要があるのではないだろうか。本稿では *The Pickwick Papers* と *Rasselas* の中のブラウン大尉とデボラが朗読した部分に着目し、それぞれの朗読箇所は Gaskell が克蘭フォードの価値観を示すために綿密に考えて選び出したものであり、格式を守り続けることに対するデボラの複雑な感情が表れているということを指摘したい。

II *The Pickwick Papers* の “a friendly swarry”

語り手であるメアリ・スミスは、大尉が “the account of the “swarry” which Sam Weller gave at Bath.” (171) を朗読したと記している。読まれたのはピクウィック氏の従者サム・ウェラーが “a friendly swarry” (494) に招待される *The Pickwick Papers* の第 36 章であるのは、“swarry” という言葉がここでしか使われていないことから明らかである。ピクウィック一行のバース滞在は、バーデル夫人との裁判に敗訴したピクウィック氏がフリート監獄に収監される間のエピソードである。*Cranford* は 1830 年代後半からこの作品が執筆された頃の 1850 年代前半までを舞台としているが、現実の出来事と密接にリンクしている作品ではない。そのため、物語の冒頭が *The Pickwick Papers* の第 36 章を含む第 13 分冊が発行された 1837 年 3 月である必然性はなく、ブラウン大尉が朗読するのは他の場面でも良かったはずである。ブラウン大尉が克蘭フォードに新たな価値観を持ち込む人物であるため、慣習にとらわれない自由な想像力とコックニー訛りの饒舌さで文学に新たな風を吹き込んだサムが大尉のお気に入りであることは間違いない。しかし、なぜ Gaskell はブラウン大尉が朗読する箇所として、サムが突飛な発想を披露する場面でも、持ち前の機知で悪役の鼻を明かす場面でもなく、物語の展開上さほど重要ではない “swarry” の場面を選んだのだろうか。この項では、サムが “swarry” で見た光景と克蘭フォードの住民たちの態度には類似が見られ、そこに彼とデボラの関係に溝が生まれた要因があるということを指摘したい。

まずは第 36 章の召使たちの晩餐会を詳しく論じる前に、バースの社交界を描いた第 34 章を見ていきたい。Dickens は、バースの社交界の様子を非常にグロテスクに描いている。例えば、ピクウィック一行の案内役を務めるバンタムは、“a charming young man of not much more than fifty” であり、彼が笑みを浮かべる際に垣間見える歯は “in such a perfect order that it was difficult to tell the real ones from the false” (473-74) であったとされている。年甲斐もなくけばけばしい衣装に身を包むこの人物は終始笑いものにされている。また、大金持ちの未亡人であるスナファナフ夫人は太った老人であるが、“nobody’s fat or old in Ba-ath” という理由で未だにもてはやされている。そしてティールームでは “a vast number of queer old ladies” と “decrepit old gentlemen” (478-79) がゴシップに興じ

ており、パースの社交界では数十年間同じことが繰り返されてきたことが示唆される。このような上流社会の面々はバンタムから誇らしげに紹介されているが、何にでも興味津々のピクウィック氏ですら彼に“drily” (480) に返答しており、目の前の光景に閉口している様子である。Roy Thomas によると、十八世紀以降のパースには“*Its houses, streets, crescents, squares and gardens are crowded not with the ghosts of the past but with living beings untouched by time or history*”といったイメージが定着しており、上流階級の気取った振る舞いはしばしば Tobias Smollett などのユーモア作家によってからかわれてきた (34)。同様に、Dickens が産業革命以降の時代の変化などなかったかのように若い頃の振舞いを続けるパースの人々に対して嘲笑的な視線を向けているのは明らかであろう。

ブラウン大尉が実際に朗読した“swarry”を描いた第36章では、パースの人々の振る舞いの滑稽さがより前面に描かれている。冒頭で、サムはバンタムの召使いのジョン・スモウカーから“*gilt-edged paper*”に書かれ、“*bronze vax*”で封をされている、召使い同士にしては身分不相応な装飾を施された招待状を受け取る。

A select company of the Bath footmen presents their compliments to Mr. Weller, and requests the pleasure of his company this evening, to a friendly swarry, consisting of a boiled leg of mutton with the usual trimmings. The swarry to be on table at half past nine o'clock punctually. (494)

スモウカーや彼の友人たちは“footman”にすぎず、“a select company”と自称することや、自分たちの集まりを“swarry” (soirée と同義) と形容するのも大仰な言い回しである。また、この手紙の追伸でスモウカーは自身のことを“the gentleman”と記しているが、彼が階級的にジェントルマンでないことは明らかである。パースの召使いたちは主人の影響を受けて気取った態度を身につけている。しかし身分が伴わないために彼らの振る舞いは主人たち以上にばかばかしいものになっている。この招待にサムは喜んで応じるが、スモウカーに導かれて会場まで移動する際に、ひそかに“a series of the very broadest and most unmitigated grins”を浮かべ、“other demonstrations of being in a highly enviable state of inward merriment” (497) を隠せずにいる。召使いたちの思い上がった態度を観察して内心からかってやろうと思いつつ、サムは“swarry”に参加しているのである。

実際、この食事会の参加者たちの振る舞いはサムの期待を裏切らない。青い服を着た“a swaggering air and pert face”を持った召使いは、りっぱな制服を着ていれば女性が寄ってくるという理由だけで今の仕事に就いている軽薄な人物で、“with an air of the most consummate dandyism”な態度でポンチ酒を配って悦に入っている。また、Whiffer という名の従僕は、自分の過失に対する罰であるにもかかわらず、温かい食事が出されなかったことに憤慨して職を辞したということを、あたかも自分が“the martyr” (502) であるかのように語っている。これらの人物は主人の身分を笠に着ているだけの俗物にすぎないが、彼らはこの場では“men of the world” (500) として敬意をもって受

け入れられている。出会った人々を茶化したり、おだてて調子に乗らせたりしながら目の前の光景を観察していたサムは、最後に頼まれたスピーチで、次のように語る。

“I only hope you’ll take care o’ yourselves, and not compromise nothin’ o’ your dignity, which is a wery charmin’ thing to see, when one’s out a walkin’, and has always made me wery happy to look at, ever since I was a boy about half as high as the brass-headed stick o’ my wery respectable friend, Blazes, there.” (503)

このスピーチは召使いたちから熱烈な喝采を浴びるが、彼らはサムの言葉に皮肉が込められていることに気づいていない。彼らの態度が“wery charmin’ thing to see”だと述べていることから分かるように、サムは彼らの振舞いを「見ている分には滑稽で面白い」と思っているだけで、彼らに敬意を抱いているわけではない。召使いたちが身分不相応な態度で主人たちを真似た振る舞いをする光景を見世物のように楽しんだサムは、彼らが今後も分不相応な“dignity”をもってふんぞり返ることを願っているのである。

このように *The Pickwick Papers* の中で徹底的に揶揄されるバースの上流階級やその召使いたちであるが、彼らの慣習や振る舞いは克蘭フォードの女性たちのものと類似する点もある。彼女たちが誰かの家を訪問する際には、多くの“rules and regulations”があり、訪問は12時から15時までの間のみ認められること、お返しの訪問は3日以内に行うこと、などといった取り決めが「昔のマン島のティンウォルド山で法律が年に一度読み上げられていたときのような“solemnity”」(166)で若い世代に伝えられている。こういったしきたりは克蘭フォードの女性たちが若い時分から遵守されてきたものであるが、昔からの慣習に大真面目に固執する彼女たちは、*The Pickwick Papers* で描かれた、時が止まったかのように過去の習慣を維持するバースの人々を思い起こさせる。しかし、バースとは異なり克蘭フォードには時代の変化の影響が確実に忍び寄っており、父親や夫が亡くなって以降、年老いた女性たちの多くは以前の生活水準を保つことが難しくなっている。彼女たちは訪問客をあまりもてなさないことを“elegant economy” (167)と称し、むしろ豪華な食事を振舞うのははしたないという理屈を作り出してまで過去の自分たちの体面を維持しようとしている。彼女たちの生活は今や経済的には不相応なものになっているのである。

語り手のメアリは克蘭フォードの女性たちを滑稽に思いつつも、お互いの困窮を見て見ぬふりをするのは相手への思いやりだと考えているので、彼女たちの訪問の様子を微笑ましいエピソードとして紹介している。しかし、*The Pickwick Papers* の第36章を“Capital thing!” (171)だと考えるブラウン大尉が、客観的な視点から取りすました態度とその実情とのギャップを見抜き、それをこの上なく愉快地思うサムのような視点から克蘭フォードの女性たちの生活を観察すれば、零落のサインは明らかであるのに“elegant”であろうとする彼女たちの振る舞いは、バースの“swarry”で気取った

態度をとる召使いたちのような滑稽なものに見えるのではなかろうか。²もちろんブラウン大尉は人の好い、他者への思いやりに溢れた人物なので、朗読を通して暗に克蘭フォードの女性たちをからかうような意地の悪い目論見は持っていない。たまたま最新号がピクウィック一行のバース滞在を扱った箇所だったため、大尉はその中の一場面を選んだにすぎないと思われる。しかし、Gaskell は単にその場の人々を笑わせようとした大尉の意図をデボラが曲解するという、勘違いから始まる喜劇的な対立を *The Pickwick Papers* への言及を通して描こうとしていたのではないだろうか。そう考えると、大尉が朗読した部分が *The Pickwick Papers* の第36章であったからこそ、彼女は気分を害したのではないかと考えられるのである。

とはいえ、デボラとバースの召使いたちの間には明確な違いもある。ブラウン大尉が朗読した箇所の内容に不快感を抱いたのだとすれば、デボラは自分たちの慣習に皮肉な視線を向けられることになりセンシティブである。これは、今や経済的に困窮しているにもかかわらず裕福な中流階級の威厳を示し続けることに対し、デボラが内心葛藤を感じているということを示唆しているように思われる。このように、冒頭でのブラウン大尉による *The Pickwick Papers* の朗読は、新旧の価値観の対立だけでなく、デボラの複雑な心情をも浮き彫りにしているのである。

III *Rasselas* の “the conversations between Rasselas and Imlac”

では、デボラの引用した Johnson 博士の一節はどういった場面であろうか。ブラウン大尉が *The Pickwick Papers* の朗読を終えると、デボラは “Fetch me “Rasselas,” my dear, out of the book-room.” とメアりに命じ、Johnson 博士が書いた唯一の小説である *Rasselas* 中の、“one of the conversations between Rasselas and Imlac” を朗読する。読み終わると、彼女は “I imagine I am now justified in my preference of Dr. Johnson, as a writer of fiction” と得意気に言う。デボラが “Dr. Johnson’s style is a model for young beginners. My father recommended it to me when I began to write letters.—I have formed my own style upon it.” (171-72) と言っていることから、彼女は Johnson 博士の文体に最も敬意を表しており、重厚な文章を読み上げて一同を感服させ、Johnson 博士が Dickens より優れていることを認めさせようと思論んでいたと思われる。しかし、そのための本がなぜ Johnson 博士の叢智が詰まった辞書でも、詩人の評伝でもなく、*Rasselas* なのであろうか。*Rasselas* は「幸福の谷」と呼ばれる外界から隔絶された場所で育ったアビシニアの王子ラセラスが、世間知に長けたイムラックを供として世の中を見聞して回る物語である。ラセラスとイムラックの関係は、世間知らずでお人よしのピクウィックと、ロンドンを隅から隅まで知る従者のサムを思い起こさせる。つまり、デボラはあえて *The Pickwick Papers* と類似した点もある *Rasselas* を選ぶことで、文体の重厚さの違いを見

² Michael Pittock もまた “Deborah Jenkins is like the pompous footman in her misplaced pride, and Captain Brown like Sam Weller” (68) と指摘している。

せつけるだけではなく、ブラウン大尉が朗読した内容に関して反駁しようとしているのではないだろうか。*Rasselas* の内容についても、より吟味する必要があるように思われる。

ラセラスとイムラックが二人で語り合う場面はあまり多くないが、彼らが最も長く会話するのは物語の第 8 章から 12 章にかけて、すなわちイムラックがラセラスに自分のこれまでの人生を語る箇所である。その中でも、注目すべきは文学を愛するデボラが好みそうな、イムラックが詩について語る第 10 章であろう。³インドやペルシャ、アラビアなどを遍歴したイムラックは、どの場所でも詩人が最も尊敬されていることに気づき、詩人になることを志す。そこでまず彼はペルシャとアラビアのあらゆる詩を読み漁るが、模倣から偉大な詩は生まれないと悟り、自然を自分の目で見て題材とすることを決意する。さらに彼は聴衆に対して詩人が持つべき態度について、次のように述べる。

“Nature was to be my subject, and men to be my auditors...I could not hope to move those with delight or terrour, whose interests and opinions I did not understand.” (61) ここでイムラックは聞き手の考えを理解する必要性を説いている。この記述を *Cranford* の文学論争に当てはめると、ブラウン大尉による、自分たちの振る舞いを想起させかねない“swarry”の場面の朗読を克蘭フォードの女性たちの前で行うことは、聞き手の心を理解していない行為である。この箇所を彼女が読み上げたとすれば、朗読を通じて彼女が大尉のデリカシーのなさを暗に批判しているようにも思われる。

Cranford との関連において第 10 章で最も重要だと思われるのが、詩人にとって自然を知ることと同等に大事だとされる、“all the modes of life”への知見に関する記述である。

“But the knowledge of nature is only half the task of a poet; he must be acquainted likewise with all the modes of life. His character requires that he estimate the happiness and misery of every condition; observe the power of all the passions in all their combinations, and trace the changes of the human mind, as they are modified by various institutions and accidental influences of climate or custom, from the sprightliness of infancy to the despondence of decrepitude. He must divest himself of the prejudices of his age or country; he must consider right and wrong in their abstracted and invariable state; he must disregard present laws and opinions, and rise to general and transcendental truths, which will always be the same.” (62)

この一節にある“human mind”は“various institutions and accidental influences of climate or custom”によって変化するものであるから、“the prejudices of his age or country”をもって観察を行うと対象の真実の姿に到達できないという考えは *Rasselas* 全体に通底するものであり、幸福とは何かを追求す

³ Martin Kellich は、短いながらもイムラックによる詩論は“a distillation of all those principles which Johnson cherished and by means of which he formulated his critical credo” (78) であると述べ、この章の重要性を指摘している。

るラセラスが目標と見なす精神的に満ち足りていそうな賢人や学者は、みな深く知り合ってみると悩みを抱え、幸せとは程遠い状態にあることが発覚する。目に映るものがすべてではないので、自分の価値観で目に移る光景を解釈することは危険だというイムラックの考えは、サムのように、外見から即座に観察対象の滑稽味を見出そうとする態度とは対照的である。

このようなイムラックの考えをもとにクランフォードの女性たちの生活を考えると、また別の側面が浮かび上がってくる。彼女たちが昔からの生活習慣に固執するのは彼女たちの見栄っ張りな俗物根性ゆえではない。クランフォードの共同体を構成するのは未亡人や未婚の中年女性で、夫や父親からの遺産や遺された年金で暮らしている。つまり、物語の冒頭で“in possession of the Amazons” (165) であると紹介され、女性が支配していることを誇りにしているクランフォードは、実は未だ男性に依存する社会なのである。夫や父親に従うままに生きてきた彼女たちは、生活習慣を改め、ひっ迫した経済状況に策を講じるほどの生活力を有していない。⁴ 男性たちが世を去った後も彼女たちが男性の影響下にあることを考えると、無理をしてでもかつての生活を変えないでいるクランフォードの滑稽な頑なさの背後にあるペースが垣間見える。

また、自身にも他者にも最も厳格に裕福な中流階級としての威厳を強いるデボラ自身も、自ら進んでその役割を担うようになったわけではない。デボラの死後、妹のマティは姉がかつて抱いていた夢について次のようにメアリに語る。

“I remember, one winter’s evening, sitting over our bedroom fire with Deborah—I remember it as if it were yesterday—and we were planning our future lives—both of us were planning, though only she talked about it. She said she should like to marry an archdeacon, and write his charges; and you know, my dear, she never was married, and, for aught I know, she never spoke to an unmarried archdeacon in her life.” (257-58)

デボラの“an archdeacon”と結婚して訓令を書くという夢は彼女らしい権威主義的なものだが、少なくとも彼女が若いころには家を出て夢を叶えることを願っていたのは確かである。しかし、いたずらの罰で折檻されたことを理由に長男で跡取りの弟ピーターが家出をし、そのショックで母親が亡くなってからは、彼女は父のために生きることを決意する。

Deborah said to me, the day of my mother’s funeral, that if she had a hundred offers she never would marry and leave my father. It was not very likely she would have so many—I don’t know that she had one; but it was not less to her credit to say so. She was such a

⁴ Patsy Stoneman はデボラの妹のマティについて“a victim of the nineteenth century’s systematic infantilisation of women” (61) であると指摘している。これは時代の変化に対応できないクランフォードの女性全体に見られる傾向だと考えられる。

daughter to my father, as I think there never was before, or since. His eyes failed him, and she read book after book, and wrote, and copied, and was always at his service in any parish business. She could do many more things than my poor mother could; she even once wrote a letter to the bishop for my father. (215)

デボラの父親のジェンキンス牧師は非常に気位が高く、自らの権威や教養をひけらかして家族や他の住民からの尊敬を求める俗物として描かれている。彼女の価値観は、“the favourite of her father” (208) として、父親の期待に応えようとして形成されたとも考えられる。また、既に引用した “My father recommended it [Dr. Johnson’s style] to me” (171) というデボラの言葉からも分かるように、Johnson 博士を好む彼女の趣味も父親の影響である。彼はラテン語交じりの荘厳な文体で詩作を行うのを趣味としていて、自分の詩が時折雑誌に掲載されることを自慢にしていたが、“she read book after book, and wrote, and copied” という一文が示す通り、目を悪くしてからもデボラを使役してこの趣味を続けていたことがわかる。彼女の文学の素養が父親の虚栄心を満たす手伝いの中で培われたものであるとすると、いかに彼女の人間形成に父親のエゴが絡みついているかが窺える。また、家での世話だけでなく、父親の公務にも付き添い、手紙の代筆まで行うのも、体力、気力ともに衰えた彼に無様な姿を晒させまいとする彼女の “slavish devotion” (Uglove 288) である。父親が亡くなった後の生活について、マティは “as Deborah used to say, we have always lived genteelly, even if circumstances have compelled us to simplicity” (215-16) と回想し、姉の言葉を借りれば自分たちは牧師館から引越した後も “genteelly” に暮らしてきたと述べる。品位を保ってきたことをデボラは誇っているが、この生活が牧師の娘として恥づかしくない行動をすべきだという意識のもとで営まれていたとすると、死後も父親は娘の行動に影響を及ぼしているとも言えるだろう。女性でありながら男性の権威者のように描かれ、作中で “dragoon” (181, 267) などと形容されるデボラは、マティとホルブロックの結婚を家柄の違いを理由に阻むなどの妹の人生に悪い影響をもたらした人物である。⁵しかし、遑れればその負の遺産の元凶は支配的な父親にあるのであって、彼女は家父長制による抑圧の一番の被害者とも言えるのである。

前項で述べたように、ブラウン大尉が朗読した *The Pickwick Papers* 中の召使たちと同様に、一見すると経済状況の変化に背を向けてかつての生活水準を維持できているふりをする克蘭フォードの女性たちは滑稽に映るかもしれない。しかし、気位の高さとわずかな財産だけを残された彼女たちは、自分の意思で過去の慣習を守っているわけではなく、未だ父親世代に隷属した状態にある。デボラが実現していたかもしれないかつての夢に思いを馳せながら “a model of feminine decorum” (182)

⁵ Jenny Uglove は “masculine authority, stern pride and rigid rules are not positive strength but barren” (287) と指摘し、*Cranford* は従来男性的とされる家父長的な価値観を持つ女性が、やさしさや思いやりのような女性的な性質を持つ男性キャラクターを媒介として本来の女性らしさを回復する物語であると述べている。

としての役割を果たしてきたと仮定すると、人間社会の本質を理解するためには表層の背景にあるすべての事情を知るべきだとするイムラックの考えを読み上げることによって、デボラは皮相的に外面の滑稽味だけを抽出して面白いサムを観察態度に、そして誤解ではあるが *The Pickwick Papers* を通して自分たちをからかっているブラウン大尉に対して反駁を行っているように思われるのである。

最後に、文学論争の場面をもう一度見てみよう。既に触れたように、デボラは *Rasselas* の朗読を終えると “I imagine I am now justified in my preference of Dr. Johnson, as a writer of fiction” と言い、さらに Johnson 博士の文章は “pompous writing” だというブラウン大尉の意見に憤慨した彼女は “I prefer Dr. Johnson to Mr. Boz” と「すべての音節に強勢を置いて」(171) 返答する (Boz は Dickens の初期のペンネーム)。ここで彼女は Johnson 博士の方が Dickens より優れていると言っているのではなく、あくまで自分の好みを表明しているだけである。*Rasselas* のイムラックは同じく主人公の導き手でも活発な若者のサムとは異なり、達観した老人で “Human life is every where a state in which much is to be endured and little to be enjoyed” (65) というペシミスティックな人生観を抱いている。実際、物質的には恵まれているが満ち足りない思いを抱いていたラセラスが真の幸福を求めた旅は、“Of these wishes that they had formed they well knew that none could be obtained. They deliberated a while what was to be done, and resolved, when the inundation should cease, to return to Abissinia” (150) と、何も得られないまま幕を閉じる。ラセラスとは異なり、「幸福の谷」のように世間から切り離されたクランフォードを出ることさえ叶わなかったデボラが、*The Pickwick Papers* で描かれる明るさではなく、*Rasselas* の諦念の方を好み、真実だと信じたいのはもっともだと思われる。Gaskell は「重厚な文体で知られる旧時代の文学の巨人」といった漠然としたイメージではなく、デボラの心境に呼応するような具体的な作品と場面を念頭に置いて Johnson 博士と *Rasselas* に言及しているのである。

IV 結

今まで見てきたように、*Cranford* の冒頭における Dickens と Johnson 博士をめぐる文学論争は、新旧の価値観の衝突だけでなく、時代の変化を見て見ぬふりをしてまでも過去の習慣にこだわることに對するデボラの複雑な心情を示唆している。文学論争の後、デボラの誤解が解かれないままブラウン大尉が鉄道の事故で轢死してしまうと、彼女は誰にでも親切で、かつ病弱な娘を献身的に介護していた大尉に偏見を抱いていたことを反省する。数年後衰えた彼女はかつてのように厳しい態度でクランフォードを統率する気力を失い、大尉の娘の子どもがデボラの家で *The Christmas Carol* (1843) を読んでることが示される。クランフォードでの Dickens の受容は、この町の変化を象徴的に示している。さらに、過去の偏屈さを反省して寛容になる老人スクルージの物語はデボラの心境の変化を思わせるものであり、ここで言及される作品は Dickens の他の作品ではなく、*The Christmas Carol* でなければならない。Gaskell が綿密に Dickens 作品への言及が自身の作品もたらす効果を考えてい

“I Prefer Dr. Johnson to Mr. Boz.”—*Cranford*における文学論争をめぐる一考察（村上幸太郎）

たことを考慮すると、Dickens 本人による勝手な書き換えに対する Gaskell の失望は、従来考えられていたよりもさらに大きいのではないかと思われるのである。

引用文献

Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia, 1992.

Dickens, Charles. *The Pickwick Papers*. Edited by Mark Wormald. Penguin Books, 1999.

--. *The Letters of Charles Dickens*. Edited by Madeline House et al., Clarendon Press, 1965-2002. 12 vols.

Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*. Twayne Publishers, 1969.

Gaskell, Elizabeth. *The Works of Elizabeth Gaskell*. Edited by Joanne Shattock, et al., Pickering & Chatto, 2005-06. 10 vols.

Johnson, Samuel. *The History of Rasselas, Prince of Abissinia*. Edited by D. J. Enright. Penguin Books, 1984.

Kellich, Martin. “Samuel Johnson’s Principle of Criticism and Imlac’s ‘Dissertation upon Poetry.’” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, vol. 25, 1966, pp. 71-82.

Pittock, Malcolm. “Hood for Boz in ‘Our Society at Cranford.’” *The Gaskell Journal*, vol. 24, 2010, pp.61-72.

Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Manchester UP, 2006.

Thomas, Roy. “Bath’s Literary Heritage.” *Bath: City or Museum?* Bath UP, 1978.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber, 1999.

夏目漱石『文学論』岩波書店、2007年。

